

【海外学会報告】

韓国ケベック学会 2024 年度 第 26 回大会参加報告
Association Coréenne des Études Québécoises (ACEQ)
26^e colloque, 16 novembre 2024, Université Hankuk des
études étrangères, Séoul, Corée du Sud

2024 年 11 月 16 日（土）に、韓国ケベック学会（ACEQ）の年次大会が韓国外国語大学校で開催され、日本ケベック学会からは小倉和子が参加した。今回の大会のテーマは「(Re)visiter la littérature migrante au Québec」。コロナ禍により、2019 年を最後に Zoom 開催となっていた大会が 5 年ぶりに対面で開催された。私が前回 ACEQ の大会に参加したのは 2009 年だが、会場は今回と同じ韓国外大だった。その意味でも懐かしい大会参加となったが、一方で、前回一緒に参加した立花英裕前会長や François HÉBERT 氏（元 AJEQ 会員）はすでに他界していて、時の流れを感じずにはいられなかった。以下、プログラムの概要をご報告したい。

大会は SHIN Junga 新会長の開会の辞に始まり、続いて、ケベック州政府在韓事務所の Damien PEREIRA 代表の挨拶、10 月に AJEQ の大会に参加してくれた PARK Heui Tae 氏（Univ. Sungkyunkwan）による参加報告があり、その後、Catherine KHORDOC 教授（Carleton University）による基調講演「Comment parler des écritures migrantes sans les réduire à une étiquette ?」があった。当初、対面参加の予定だった Khordoc 氏は急遽 Zoom 参加となったが、14 時間の時差にもかかわらずリアルタイムで参加してくれた。移住文学の専門家ならではの包括的な視点から、移住者によるテキストにレッテルを貼り、ケベックの主流文学の周辺にゲッター化してしまう危険性については、批評の側からも作家自身からもたびたび指摘されていることが報告された。とはいえ、移住や亡命について語るテキスト自体はたしかに存在し、それらはアイデンティティの問題、言葉への鋭い意識、ケベックやカナダという境界の外の世界に関する歴史的記述、間テキスト性など、さまざまな重要な要素を含んでいる。そのようなエクリチュールをケベック文学の周辺に追いやるのではな

く、ケベック文学自体のグローバル化の中でとらえ直す必要があると主張していた。コメンテータを務めた ACEQ 元会長の LEE In Sook 氏（漢陽大学校）からは、「移住」は積極的な意味を持ちうるものであり、マイノリティである移民作家たちはケベックの「文学的歓待」(hospitalité littéraire)を受けてその「文学風景」を豊かにし、ケベック文学を「世界文学」へと開く役割を果たしているのではないかと的確なコメントがあった。

昼食をはさんで総会が開かれ、午後の部では、以下4件の発表があった。

小倉和子 (AJEQ), « Écriture interculturelle : Dany Laferrière, compagnon de route de Bachô ».

SHIN Okkeun (Univ. nationale de Kongju), « Littérature migrante au Québec et Franco-Amérique ».

KI Young-In (Univ. nationale de Kyugpook), « L'Universalité de l'écriture migrante : le déplacement de Dany Laferrière ».

LEE Sanghoon (Univ. nationale de Chonnam), « Adaptation cinématographique de la littérature migrante du Québec : *Incendies*, de la pièce de Wajdi Mouawad au film de Denis Villeneuve ».

小倉は上記のタイトルで、かねてより自身の懸案となっていたダニー・ラフェリエールの作品と芭蕉の関係について考察した。ラフェリエール作品のいたるところに認められる芭蕉の痕跡を、主として『甘い漂流』、『吾輩は日本人作家である』、『帰還の謎』、『芭蕉と道連れ』(Sur la route avec Bashô、邦訳未刊)の4作から拾い上げ、3世紀以上前の日本の俳人とラフェリエールの根底に等しく流れる旅・放浪・漂流の意識に注目するとともに、それこそが、『芭蕉と道連れ』において多くの作家や芸術家たちと時空を超えて自在な対話を行うラフェリエールの文学的原動力となっていることを明らかにした。コメンテータを務めた KIM Bohyun 氏（京畿大学校）からは、俳句の形式上の約束事にラフェリエールがどこまで忠実なのかとの質問が寄せられた。これに対し、ラフェリエールは、俳句の形式上の決まりに従うことよりも、その短さ、軽さ、さらには芭蕉の旅や放浪観、俳句と俳文の混交スタイルなどのほうにより大きな関心をもっていると思われると答えた。なお、発表原稿を元にした研究ノートが本号に掲載されたので、あわせて参照されたい。

続いて、ACEQ 元会長の SHIN Okkeun 氏は、ケベックとフランス語圏カナダの移住文学がもつフランス系であることとアメリカ性という二重のアイデンティティを取り上げた。そして、従来のケベック文学は移住文学による

文化のアメリカ化、雑種化、混血に不満や不安を抱いてきたが、ナショナルな「我々」をより大きな枠組みでとらえ、アメリカ性を含んだ新しい「我々」の物語をつくりだす必要があると説いた（ようだ）。しかし、残念ながら、ACEQ 会員の発表はすべて朝鮮語で、パワーポイントの資料もほとんどが朝鮮語だったため十分理解できたとはいいがたい。会場の外でケベック州政府在韓事務所の代表や職員、あるいは休憩をとっている ACEQ 会員などと意見交換する時間も多かったが、その時間もまた貴重で楽しいものだった。とはいえ、AJEQ の大会で留意しているように、言語を解さない会員のために、せめてレジュメやパワーポイントの資料だけでもフランス語（または英語）と二言語表記してもらえるとありがたいと感じた。当日の様子は以下のサイトからごらんいただける。

<https://aceq.kr/fr/2024>

懇親会は会場近くのイタリア料理店で行われた。ACEQ の歴代の会長である HAN Daekyun、LEE In Sook、HAN Yongtaek、SHIN Okkeun、そして現会長の SHIN Junga ら（敬称略）と今後の両学会の協力関係について話すことができたほか、まだ AJEQ の大会には参加したことのない若手会員とも知り合うことができて、対面開催ならではの充実した1日（前後も含めると3日間）だった。

2024 年度に入って、ケベック州政府の在韓事務所は Office から Délégation に昇格したそうだ。ソウルの中央を流れる漢江（ハンガン）沿いに建ち並ぶ瀟洒な高層建築などを見ると都市の目覚ましい発展を実感させられる。ケベック州政府もこのエネルギーに期待しているのだろう。昨年日ケ交流 50 周年を迎えた日本としても、過去からの蓄積のうえに胡坐をかくことなく、次世代に向けてケベック研究を盛り立てていく必要性を感じた。

東京もソウルも 11 月にしては比較的穏やかな気候だったが、ソウルの秋の深まりは東京より確実に早く、宿泊していたソウル国立大学の教授館の周りはイチョウやカエデの黄（紅）葉が見事だった。個人的には 10 年ぶりの訪韓だったが、いつもながら熱い歓待を受け、余韻冷めやらぬまま帰国の途についた。2～3 年後には 5 月ごろ合同で大会を開催しようとのアイディアも出ている。入念な準備が必要だが、実現したらきっと有意義なものになるにちがいない。

小倉和子（立教大学）